

<論文>

開化啓蒙期の翻訳行為

—文部省『百科全書』をめぐって—

Translating in the Early Meiji Period:

A Case of Chambers's *Information for the People*

長沼美香子

(立教大学)

Abstract

This paper will focus on Chambers's *Information for the People* and the project to translate it organized by the then education ministry in the early Meiji period when Japan opened its doors to the world and underwent the turbulent times of so-called civilization and enlightenment. First, in order to locate the translated texts historically, the author traces the changes of institutions where translating was carried out in 19th century Japan. Then the governmental translation project is outlined before analyzing three texts lexicographically to highlight evidence of translational acts under the assumption of imaginary equivalence between the two asymmetrical languages. The postcolonial scholar Tejaswini Niranjana maintains that translation *into* English has constructed a distorted image of the 'East', in particular India. This paper explores, in turn, translation *from* English in the context of Japan's modernity.

1. はじめに

本稿では、開国後間もない明治初期の日本において文部省主導で実施された翻訳プロジェクト『百科全書』に焦点をあてる。まず翻訳機関の変遷を歴史的背景として概観した後に、文部省『百科全書』そのものの概要をまとめる。さらに、原著 Chambers's *Information for the People* と比較しながらのテキスト分析を行う。

ニランジャンナ (Tejaswini Niranjana) は、19 世紀インドにおける植民地政策と翻訳の問題系を論ずるなかで、「支配者なき植民主義」(absentee colonialism) という表現で、英語への翻訳によって「東洋」のイメージが書き換えられて構築された点を糾弾する (Niranjana, 1992)。起点言語と目標言語の間に力の不均衡があれば、翻訳は非対称的な権力関係から逃れることができないのである。この非対称性の力学は、英語からの翻訳にはどのように投影されるのだろうか。

近代日本の文明開化とは何であったのか。本稿は、その不可視的側面を可視化する試みでもある。ここでの不可視性とは翻訳の謂いである。等価という幻想を背負った翻訳行為の遂行性、それが近代日本語に残した痕跡を文部省『百科全書』の翻訳テキストにおける語彙と文法に探る。

2. 翻訳機関の変遷

2.1 フェートン号事件以降

近代日本の幕開けは、1853(嘉永 6)年のペリー率いる黒船来航、そして翌年の日米和親条約(神奈川条約)という不平等条約の調印を契機とする。だが、英書翻訳の歴史を紐解くならば、1808(文化 5)年のフェートン号来航にまで遡らなければならない。この事件の衝撃によって、開国まで半世紀を残す江戸幕府の鎖国体制下で日本の近代化は用意され始めていたのである。

わが国において翻訳は、明治政府が江戸幕府から継承した重要な事業のひとつであった。杉村武『近代日本大出版事業史』は出版文化史という観点から明治初期に着目し、「出版印刷がまず政府自らの手で行われ、各省また盛んに出版活動を行いその大半が文部省であったこと」(杉村, 1967, p. 93)を指摘している。明治初期に文部省主導で行われた国家的翻訳事業としての『百科全書』は、わが国で刊行された百科事典の出版史上、記念碑的な位置を占める。例えば、大槻如電¹による『日本洋学年表』の「明治十年丁丑」の欄には次のように記されている。

百科全書 第一篇 天文地文地質気象 文部省刊行

文化辛未幕府天文台に翻訳局を置く。其第一着手「厚生新編」百科全書也。此局変転六十又年、是歳立て大学となる。而して文部(省)先此書を刊行す。首あり尾ありと云ふべし。

この中で「文化辛未」は文化 8(1811)年、「変転六十又年」は文部省創設に至るまでの翻訳機関変遷の期間、「大学」とは明治 10 年に設立された東京大学を指す。日本で最初に翻訳出版された西洋式百科事典である『厚生新編』とそれに続き刊行された文部省『百科全書』とをこのように「首あり尾あり」とつないで位置付けているのである。ちなみに『厚生新編』は、フランス語百科事典(ノエル・ショメール著)のオランダ語版を底本とし、徳川家斉の命を受けて 1811(文化 8)年に始まった江戸幕府の翻訳事業による成果物であった。完成時期は明らかではないが四半世紀以上の年月を費やしたとされる。

幕末から明治初期に至る近代翻訳機関の淵源は、オランダ船籍と偽ったイギリスの軍艦が長崎港に入港し食料などを要求したフェートン号事件の後、1811(文化 8)年 5 月に設置された幕府天文台翻訳局(蕃書和解御用)に遡る。この翻訳局の新設は天文方高橋景保²の提案によるもので、「当時外国文書翻訳の必要が外交関係に促されて次第に多く、それを長崎通詞に任しておいては火急の間にあわぬ場合が多かったため」(杉村, 1967, pp. 126-127)でもある。高橋自らが監修し通詞の馬場佐十郎や仙台藩医の大槻玄沢ら複数の翻訳者が協力したのが『厚生新編』であり、「蘭学者には必携の書であり西欧文化移入に大きな役割を演じた」(ibid.)という。またフェートン号事件は、日本の洋学史における蘭学から英学への転換点ともなった。この事件にショックを受けた江戸幕府は、オランダ語の通詞らに英語学習を命じるとともに、初の英和辞

¹ 大槻如電は文部省にも勤めた著述家。儒学者・漢学者である大槻磐溪の次男で、言語学者として著名な文彦の兄である。生年は 1845(弘化 2)年、没年は 1931(昭和 6)年。

² 高橋景保(1785-1829)は江戸幕府の天文方・書物奉行。天文学者であり、伊能忠敬の測量を支援し、その実測に基づいた日本地図「大日本沿海輿地全図」を完成させた人物でもある。1828(文政 11)年のシーボルト事件で投獄され、翌年獄死した。

書『暗厄利亜語林大成』を1814(文化11)年に編纂させている。その後の翻訳機関は、1855(安政2)年に洋学所、1856(安政3)年に蕃書調所、1862(文久2)年に洋書調所、1863(文久3)年に開成所、1868(明治元)年に開成学校、1869(明治2)年に大学校、1871(明治4)年7月に文部省と改称される。そして同年9月に文部省編輯寮が置かれ、翌年1872(明治5)年9月にはそれが編書課と反訳課となった。このような目まぐるしい変遷を経て、東京大学が1877(明治10)年に創立される。以上の洋学教育行政機関によって英書翻訳の実践は着実に担われてきた。後述のテキスト分析から明らかになるように、その継承と切断が明治初期の翻訳行為なのである。

文部省『百科全書』の翻訳プロジェクトは、文部省編輯寮の箕作麟祥が中心となって企画した事業である。当時の文部省の差し迫った任務は教科書などの編纂であった。

初メ文部省ヲ置クヤ学科教授ノ書欠乏ナルヲ以テ明治四年九月編輯寮ヲ置キ教科書ヲ編輯ス是ヨリ先キ大学ニ語彙掛アリ俗訳掛アリ南校ニ反訳局アリ東校ニ医書反訳掛アリ是ニ至リ尽ク之ヲ編輯寮ニ収ム而シテ編ム所ノ書其宜ヲ得サルヲ以テ五年九月遂ニ之ヲ廢シ更ニ東京師範学校中ニ於テ之ヲ編輯シ又別ニ省中ニ編書課ヲ置キ以テ専ラ教科書ノ欠乏ヲ補フ其既ニ刻スル所ノ書数左ノ如シ

(『文部省第一年報』1873)

1873(明治6)年11月に森有礼の推薦で編書課長となったのが西村茂樹である。西村は文部省『百科全書』のもうひとりの立役者であり、自ら「天文学」を翻訳するとともに、プロジェクト内の校正者グループをまとめている。その伝記では、次のように文部省の実情を記しながら『百科全書』にも触れている。

又省中に反訳課ありて、河津祐之其課長となり、洋学者を以て課員とす。亦教育用の西書を翻訳す。然るに此頃は洋書を読む者は多く和漢の書に通せず、是を以て訳成る毎に必ず漢文に通ずる者をして其文を修正せしむ是を校正という。

又前文部卿の時より『百科全書』の編あり是は英人チャンパー氏の原書を訳すものにして、其訳者は本省の官吏に限らず広く世界の洋学者に托す。是又脱稿の上本課にて是を校正して出版するなり。此校正者は皆編書中にあり、那珂通高、大井潤一、清水世信、宮崎愚、内村耿之介、小林病翁、長川新吾の如き是なり。本課に属する画家に狩野良信、北川有卿あり、板下書には松井甲太郎あり。又加藤弘之の『国法汎論』内田正雄の『輿地誌略』も本課にて是を校正し出版するなり

(松平, 1933, p. 378)

明治維新後に文部行政を担当したのは大学校(翌年には、大学)であり、これが文部省の前身である。文部省編輯寮はその創設の翌年には編書課と反訳課となり、さらに1880(明治13)年文部省編輯局として再編される。この組織を中心に内外の洋学者の協力を募りながら、文部

省『百科全書』刊行の国家的事業は進められたのである。

2.2 翻訳ビジネス

現代では「翻訳家」という職業があり、ビジネスとしての翻訳に違和感はないだろう。専門書や文学書などの場合は、研究者や文学者が翻訳することもあるが、いずれにせよ、翻訳に対しては何らかの対価が支払われる場合が一般的だ。ただし、「クラウドソーシング」(crowdsourcing)によるボランティア翻訳も、インターネット社会のトレンドであることは付け加えておこう。

民間の翻訳会社の先駆けは、社会主義者の堺利彦が1910(明治43)年12月に設立した「売文社」であろう(黒岩, 2010 参照)。「赤旗事件」で投獄中であったため大逆事件の難を危うく逃れた堺は、出獄前から売文社の構想を練っていたとされる。1912年刊『売文集』の「序(売文社の記)」によると、得意先に配布した「売文社営業案内」には、「(イ)新聞、雑誌、書籍の原稿製作。(ロ)英、仏、独、其他外国語の和訳。(ハ)和文の外国語訳(英訳、仏訳、独訳等)。(ニ)演説、講義、談話等の筆記。(ホ)趣意書、意見書、報告書、祝辞、祝文、広告文、書簡文、其他一切文章の立案、代作、及び添削。(以下略)」とある。英語は堺自身、フランス語は大杉栄、ドイツ語は高島素之などが担当し、しかも「社中で出来ない事は、それぐ特約の専門家にやツて貰ひますから、何卒御安心の上、御用命を願ひます」(堺, 1912, p. 619)とも書いており、昨今の翻訳会社で一般的な外注(アウトソーシング)方式をすでに採用している。

売文社のヒントになったのは硯友社社則第6条かもしれない(畑, 2003 参照)。硯友社社則とは尾崎紅葉が起草したもので、『我楽多文庫』の第1号(1888年5月発行)に掲載された。社則全9条の中で第6条には、「本社は小説の起草。劇場の正本。小説の反訳(潤筆は一字につき千金づゝ申受候)広告の案文。歌句戯文の添削批評等の御依頼に応じ可申候。但し建白書の草案起稿其外政事向の文書は命に替へても御断申上候」と書かれている。

このような翻訳ビジネスの初期形態の原型としても、明治初期の文部省における翻訳事業はパイオニア的であると指摘できる。それは「賃訳」というシステムの採用である。

2.3 「賃訳」とは

翻訳の出来高に応じて料金を支払う形態は、かつて「賃訳」と呼ばれていた。それは明治初期に始まる。石井研堂『明治事物起原』の「賃訳所の始」には、「依頼に応じて、洋文翻譯をやる所は、明治五年秋に始れり」とあり、「この時代は、翻譯の仕事が多く、『賃訳』といふ新しい言葉さへ出来せり」と説明する。そして、翻訳所(神田雉子町三十番地)の雑誌広告として、「十行二十字一枚につき 英文和訳 金一円、和文英訳 金三分」を紹介している。

この時期は、折しも文部省『百科全書』の翻訳プロジェクトが着手された頃である。石井は「百科全書の賃訳」という項目も設けて、大槻文彦『箕作麟祥君伝』から佐原純一の談話として次を引用している。ただし、福鎌(1968, pp. 41-45)も指摘するように、実際の『箕作麟祥君伝』の記述とは齟齬もあるので、部分的に石井研堂自身の意見が引用文中に混在していると思われる。例

えば、「フルベツキ³の持つて居た」という件は実際にはない。

私は南校に居て、明治四年の七月か八月に、編輯寮の大属になりましたが其時、箕作麟祥先生が、編輯頭をやつて居られました、其時分先生が頭になつて、フルベツキの持つて居たチャンブルの百科全書—インフルメーションオブピープルとかいふもの百科ばかりあるので、あれを割訳にしようといつて引つぽといて、賃訳に出しました。編輯寮に勤めて居る者でも、学校の教員をして居る者でも、福沢の人たちでも誰でも英書の読める者には、訳させたものです。[...]

牟田口元学は、少外史か何か勤めて居ましたが、箕作先生を嫌つて、官吏たる者が、賃訳をするのは、不都合千万だといふことを、屢言つて居ました。尤も、箕作先生の収入は、多い方で、多い時には給料よりも多いこともありました。百科全書の中の、心理学などは、むづかしくつて、誰も訳し手がない。そんなのは、十行二十字の草稿を、一枚四円で、箕作先生が翻訳されました。休みの日などには一日に余ほど出来ました。他の人の翻訳は、一番安いのが十行二十字一枚一円でした。

(石井, 1944 [1907], pp. 569-570)

文部省『百科全書』は、明治初期に実施された大規模な翻訳プロジェクトであった。国家的事業として文部省の箕作麟祥と西村茂樹が主導した出版事業に「賃訳」という形態が採用されて、文部省内外の複数の洋学者が関与した。福鎌(1968, pp. 372-373)によれば、翻訳者は、箕作麟祥のグループ、慶応義塾関係者、文部省関係者、大学東校関係者、その他に分類される。明治初期の東京には福沢の慶応義塾以外にも洋学私塾が多数あり、そのようなネットワークを通して洋学者に翻訳が発注され、出来高に応じて翻訳料が支払われた(途方もなく高額であったことも付け加えておく)。そして、翻訳者から提出された訳稿は、漢学者が校正して仕上げた。校正者の中心は西村茂樹の率いる文部省編書課であるが、洋々社⁴関係者も協力している。「校正」「重校」「同校」「訂」「刪訂」などの違いが何を意味するのかは不明であるし、どの程度まで筆を入れたのかは定かではない。参考までに、箕作麟祥の別の訳稿への校正については、次のような逸話が残っている(石井, 1944 [1907], pp. 541-542)。

私[引用者注:池山栄明]が箕作麟祥先生のお世話になりて居ましたのは明治五六年先生が権大内史をして居られた比、私は翻訳局等外で、先生の配下に居り、役所がひけてから、両国のお宅に、度々書物に参りました。その時、写したのは萬国史と覚えて居ります。それは賃訳で、先生が翻訳をされ、私が中清書をしてそれを辻士革といふ人に廻す。辻がそれを校訂をします。処が、箕作先生は、辻の筆を入れたのを、校正とは言はせない、

³ Guido Fridolin Verbeck (1830-1898) はオランダ系アメリカ人で、1859 (安政 6) 年に宣教師として来日し、長崎の済美館や致遠館などで英語を教え、1869 (明治 2) 年に開成学校に赴任した。その後、1873 (明治 6) 年に太政官の正院翻訳局と左院に勤務し、法典の翻訳などに携わった。

⁴ 洋々社は明治初期 (明治 8 年 4 月～13 年 3 月) の学術結社で、西村茂樹や大槻文彦らが参加。機関誌『洋々社談』を発行していた。

たゞ校字だけを許されました、それですから、本になつたものに、辻士革校とあり、校正とはありませぬ。辻といふ人は文を直すのが中々上手でございました、先生の翻訳されたものを、私が中清書をし、辻が筆を入れたのを、先生が一応見てそれを私が浄書するといふ手順で、長い間やりました。

萬国史の賃訳は、十行二十字で先生の御所得が一枚二円からで、辻が二十銭を頂き、私は二銭づゝ頂きました(池山栄明談)。

箕作先生が、仏国法律を訳される時分には辻士革といふ人が居て、筆記をしました、それは先生が前に読んで置かれて、大抵午前の仕事にして、口訳をされました。午前だけで八九枚は翻訳が出来たやうに覚えて居ります。辻といふ人は前は、開成所の筆記方をして居て、それから文部省に来た人で、校合をするのが役でありました、原書はよめなかつた人です(鈴木唯一談)。

辻といふは、へいくした漢学先生、妙な人でしたが箕作先生から「斯ういふ意味の字は」と聞かれると「それなら、斯ういふ字ではどうございませう」と言うて、字の工夫をする、それで、箕作先生が、翻訳をされると、辻が目を通すことに為つてゐました(原田網彦談)。

箕作の個人的な翻訳を校正する場合とは異なり、文部省『百科全書』では複数の翻訳者が関与するので、グループ作業に起因する難しさもあるだろう。訳語の不統一をはじめとする校正の悩ましさは、丸善3巻本に追加された索引の「凡例」を読むと推測される。

百科全書ノ翻訳ハ数十人ノ手ニ成ルカ故ニ或ヒハ一事物ニシテ数様ノ訳語ヲ帯ヒ区々トシテ一定セサル者多シ此索引ノ如キハ今日世人ノ通用スル者ニ非サレハ搜索ニ不便ナラン故若シ搜索ニ不便ナリト思惟スル者アラハ更ニ今日通用ノ訳語ヲ命シ原語ト共ニ各々其頭字ノ仮名文中ニ編入セリ 例ヘハ元ト「保険命」トアルヲ別ニ「生命保険」ト訳シ「闘牌」トアルヲ「歌加留多」ト訳シ又「捉影術」トアルヲ「写真術」ト訳セルカ如シ他皆之ニ倣フ

以上のような「賃訳」システムで、文部省『百科全書』は複数の参加者により翻訳され校正された。その翻訳形態はアウトソーシング(外注)の原型であり、翻訳ビジネスの事始めともいえる。文部省『百科全書』は国家的プロジェクトとして国民の啓蒙のために企画運営されたものであるが、翻訳がビジネスとしての様相も呈してきた点には注目しておいてよい。

3. 文部省『百科全書』の概要

3.1 先行研究

いわゆる「百科全書」と呼ばれるものが幾種類も存在するため、本稿では文部省『百科全書』として該書を他と区別する。この文部省『百科全書』についての数少ない先行研究の一冊は、未完の研究書、福鎌達夫『明治初期百科全書の研究』(風間書房、1968年)であり、著者病没

後に刊行されている。著者が入院中の病室に資料を持ち込んで命を削り最期まで執筆した様子が、編者「あとがき」から生々しく伝わる。これは、文部省『百科全書』に関する包括的な研究の嚆矢であること疑いないが、残念ながら病魔により著者が目論んだ形での完成は遂げられなかった。同時期のもう一冊、杉村武『近代日本大出版事業史』(出版ニュース社、1967年)では、出版文化史における明治初期の文部省の出版事業として、文部省『百科全書』も対象として取り上げられているが、事実誤認の記述も散見される。そして福鎌と杉村の研究から10年の歳月を経て重要な展開を見せたのは、菅谷廣美『「修辞及華文」の研究』(教育出版センター、1978年)である。書名の示す通り、菅谷の焦点は「修辞及華文」にあるが、文部省『百科全書』全体に関する新事実も加えられており、福鎌と杉村による研究を補完する。しかしながら、菅谷の研究では翻訳研究という観点は欠如しているし、この研究からも既に30年以上が過ぎている。以上のような包括的な先行研究以外にも、文部省『百科全書』についてはこれまでも、個別断片的に言及されることがあった。特に、菊池大麓訳「修辞及華文」は、坪内逍遙が『小説神髓』で引用していることもあり、明治初期の文学論として著名である(柳田、1961)。しかしながら、同時代の『明六雑誌』などの研究と比較しても、文部省『百科全書』は詳らかにされていない諸側面が多く残されている研究未開の地であり、さらなる研究の可能性へと開かれている。

3.2 出版事情

文部省『百科全書』の出版状況は非常に複雑である。文部省から刊行された初期の分冊本や合本版以外にも、途中からは民間の有隣堂や丸善商社出版なども関与しており、分冊の装丁にも和装2冊本と洋装1冊本がある。20冊の合本版や大判の3巻本、さらに教科書用に地方で出版された翻刻版まで揃い、その書誌的な豊かさからは使用形態の多様性を想像させる。近年では青史社とゆまに書房からそれぞれ異なる版(青史社は文部省版と有隣堂版などの混合で1983-86年刊、ゆまに書房は索引を含めた丸善3巻本で1985年刊)が復刻出版されており、また、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでも部分的に閲覧できる。以下は、青史社(91編)とゆまに書房(上巻30編・中巻33編・下巻30編)復刻版の目次である。両者を比較するだけでもタイトル名や配列に違いがあることが分かる。青史社に直接問い合わせ得た情報によると、同社復刻版は主として国立国会図書館の蔵書を底本としている。この底本は、近代デジタルライブラリー館内限定公開の資料で確認できるものもある。

【青史社復刻版】

天文学、気中現象学、地質学、地文学、植物生理学、植物綱目、動物及人身生理、動物綱目、物理学、重学、動静水学、光学及音学、電気及磁石、時学及時刻学、化学篇、陶磁工篇、織工篇、鋳物篇、金類及鍊金術、蒸気篇、土工術、陸運、水運、建築学、温室通風点光、給水浴澡堀渠篇、農学、菜園篇、花園、果園篇、養樹篇、馬、牛及採乳方、羊篇、豚兔食用鳥籠鳥篇、蜜蜂篇、犬及狩猟、釣魚篇、魚獵篇、養生篇、食物篇、食物製方、医学篇、衣服及服式、人種、言語、交際及政体、法律沿革事体、太古史、希臘史、羅馬史、中古史、英国史、英国制度国資、海陸軍制、欧羅巴地誌、英倫及威

爾斯地誌、蘇格蘭地誌、愛倫地誌、亜細亜地誌、亜弗利加及大洋州地誌、北亜米利加地誌、南亜米利加地誌、人心論、骨相学、北欧鬼神誌、論理学、洋教宗派、回教及印度教仏教、歳時記、修身論、接物論、経済論、人口救窮及保険、百工儉約訓、国民統計学、教育論、算術及代数、戸内遊戯方、体操及戸外遊戯、古物学、修辭及華文、印刷術及石版術、彫刻及捉影術、自然神教及道德学、幾何学、聖書縁起及基督教、貿易及貨幣銀行、画学及彫像、百工応用化学、家事儉約訓

【ゆまに書房復刻版】

上巻: 天文学、地質学、気中現象学、地文学、植物生理学、植物綱目、動物及人身生理、動物綱目、物理学、重学、動静水学、光学及音学、電気及磁石、時学及時刻学、化学篇、百工応用化学篇、陶磁工、織工篇、有要金石編、金類及鍊金術、蒸汽篇、土工術、陸運、水運、温室通風点光、給水浴澡掘渠、菜園、花園、果園篇、養樹篇

中巻: 馬、牛及採乳方、豚兔食用鳥籠鳥篇、蜜蜂篇、犬及狩猟、釣魚、漁獵、養生、食物篇、食物製方、医学、衣服及服式、人種篇、交際篇、法律沿革事体、太古史、希臘史、羅馬史、中古史、英国史、英国制度国資、海陸軍制、欧羅巴地誌、英倫及威爾斯地誌、蘇格蘭地誌、愛倫地誌、亜細亜地誌、東印度地誌、亜弗利加地誌、大洋州地誌、北亜米利加地誌、南亜米利加地誌、西印度地誌

下巻: 人心論、骨相学、論理学、自然神教及道德学、洋教宗派、回教及印度教仏教、北欧鬼神誌、歳時記、修身論、接物論、経済論、貿易及貨幣銀行、人口救窮及保険、百工儉約訓、国民統計学、教育論、算術及代数、画学及彫像、戸内遊戯方、体操及戸外遊戯、古物学、修辭及華文、印刷術及石版術、彫刻及捉影術、家事儉約訓、經典史、造家法、牧羊篇、農学、幾何学

3.3 Chambers's *Information for the People* について

翻訳にあたり底本としたのは Chambers's *Information for the People* であり、この点は、次のような丸善3巻本の「例言」などでも明らかにされている。

此ノ書原名ヲ「インフォルメーション、ファル、ゼ、ピープル」ト云フ英人ウイルレム、チャンブル及ロベルト、チャンブル氏嘗テ地球上ノ事物ニ就キテ其ノ大旨ヲ人ニ諭サンカ為ニ撰セシ所ナリ其ノ体タル天文学ヨリ始マリテ家事儉約訓ニ終ル篇ヲ分ツコト凡九十二詳細ヲ欠クニ似タリト雖亦以テ其ノ概略ヲ觀ルニ足レリ乃篇ヲ分チテ数人ニ課シ次ヲ以テコレヲ訳セシメ百科全書ト名ツク刻將ニ成ラントシテ人其ノ多キヲ憂フ因リテ更ニ数篇ヲ合セコレヲ活字版ニ附ス觀ル者ヲシテ披閱ニ便ナラシメンコトヲ欲スレハナリ

此ノ書全部ヲ通シテコレヲ校スレハ語同シクシテ訳字同シカラサル者或ハコレ有リ地一ニシテ仮字ト漢訳トヲ異ニスル者モ亦或ハコレ有リ訳者各異ニシテ字ヲ下スコト同シカラサルニ由リテナリ

此ノ書原刻揭示スル所ノ篇目漸ヲ逐ヒテ改メタル者間コレアリ星学ヲ改メテ天文学トシ衣服

篇ヲ改メテ衣服及服式トセルカ如キ是ナリ観ル者其ノ原刻ニ異ナルヲ以テコレヲ怪シムル
コト勿カレ

だが、底本となった原著の入手経路やどの版を訳したのかの特定については、諸説が錯綜している。この翻訳プロジェクトは長期にわたる国家的大事業であったにもかかわらず未知の部分が多く、さらに出版年が無記載の原著が状況を一段と複雑にしている。これまでに確認した先行研究(杉村, 1967; 福鎌, 1968; 菅谷, 1978; 松永, 2005 など)を整理すると、「無年記版」は1867年に刊行された第4版と同一であり、これが底本として主に使用され、途中から第5版(1875)によって一部補訂されたという判断が妥当ではないかと思われる。丸善版では次の表1に示した通り、6編が新たな訳者によって第5版からの翻訳に差し替えられた。この6編中、『有要金石篇』以外は丸善3巻本では下巻の最後に一括して再配置されている。

表1: 文部省版と丸善版の部分的比較

文部省版(1873-83)			丸善版(1883-85)		
原著第4版(1867)	翻訳タイトル	翻訳者	原著第5版 (1874/75)	翻訳タイトル	翻訳者
Mining-Minerals	鉱物篇	鈴木良輔	Useful Minerals	有要金石篇	松田武一郎
History of the Bible - Christianity	聖書縁起及 基督教	吹田鯛六	History of the Bible	経典史	原弥一郎
Architecture	建築術	関藤成緒	Architecture	造家法	都築直吉
The Sheep - Goat - Alpaca	羊	吹田鯛六	The Sheep - Goat - Alpaca	牧羊篇	勝島仙之介
Agriculture	農学	松浦謙吉	Agriculture	農学	玉利喜造
Geometry	幾何学	佐原純一	Geometry	幾何学	原弥一郎

文部省『百科全書』が底本とした Chambers's *Information for the People* を刊行したのは、チェンバーズ社(W. & R. Chambers)である。この出版社は William Chambers(1800-1883)と Robert Chambers(1802-1871)の兄弟が1832年にエジンバラで設立したものであり、英語辞書や百科事典で名の知られた英国の出版社(Chambers Harrap Publishers)の前身である。Chambers's *Information for the People* の初版(1833-1835)は、大項目の百科事典として小冊子で刊行された。第2版(1842)以降には分冊版と2巻本があり、第3版(1848, 1849)、第3版改定(1857)、第4版(1867)、第5版(1874, 1875)と続いた。第4版と第5版の編集実務を担当した Andrew Findlater(1810-1885)は後に、全10巻に及ぶ本格的な百科事典である Chambers's *Encyclopaedia*(1860-1868)の編集もしている。ちなみに、この Chambers's *Encyclopaedia* は、Ephraim Chambers(1680?-1740)の *Cyclopaedia*(1728)と混同されることもあるが、無関係である。イーフレ임・チェンバーズの『百科事典』は、フランスの啓蒙思想家デイドロとダランベールの『百科全書』(1751-1772)に影響を与えたことで、広く世の耳目を集めたため

知名度が高い。時代的には1世紀以上も開きがあるのだが、著者が同姓の Chambers という英国人であったことや「百科全書」という書名が相俟って、幾重にも誤解を招いたと思われる。

幕末明治期の日本におけるチェンバーズ社の他の書籍を補足的に挙げておこう。福沢諭吉『西洋事情外編』(1867 [慶応 3])は、同社の *Political Economy for Use in School and for Private Instruction* (1852)に基づいて書かれたものである。明治初期に広く使用された自然科学の入門書である小幡篤次郎訳『博物新編補遺』(1869 [明治 2])は、ロバート・チェンバーズ著 *Introduction to the Science* (1836)の1861年版を、福沢諭吉訳『童蒙教草』(1872 [明治 5])は同社の *Moral Class-Book* (1839)を各々底本とした翻訳書である(松永, 2005)。

また、アンデルセン童話の受容において「日本の読者を彼の作品に導くきっかけをつくったのは、イギリスのチェンバーズ(W. & R. Chambers)社が発行した『スタンダード・リーディング・ブック』という教科書であった」(川戸, 1999, pp. 244-252)という。1875(明治 8)年の『東京英語学校教則』には「在期中チャンブル氏第二読本ヲ卒ラシム」の記載があり、東京英語学校、東京開成学校、東京大学予備門など一部の有名校で、「マッチ売りの少女」などの英訳が英語教材として使用された。当時(明治 10 年前後)広く使用されていたアメリカのハーパー(Haper & Brothers)社のウィルソン・リーダーと比較して、チェンバーズ社の読本には文学作品が豊富であり、「日本でもっとも早い段階の西洋文学との出会い」(ibid.)を用意したことになる。さらに、坪内逍遙が1900(明治 33)年に編集した『国語読本』にはチェンバーズのリーダーからの文学作品が翻案されて掲載されている。その歴史的役割に注目すれば、「チェンバーズの英語リーダーというのは、日本の読者がはじめてアンデルセンの作品と出会うきっかけを作ったばかりか、全国の学校に西洋童話を普及させたという点で、近代文学史上忘れがたい教科書であった」(ibid.)と川戸は評価している。

4. 文部省『百科全書』のテキスト分析

ここでは文部省『百科全書』から「天文学」「言語」「幾何学」の3編を選び、テキスト分析を試みる。

4.1 西村茂樹訳「天文学」の分析

青史社刊行の復刻版には「明治9年文部省印行」とあり、底本は第5版の *Astronomy* である。本編を翻訳した西村茂樹は、先述の通り、1873(明治 6)年に文部省編書課長、1880(明治 13)年には文部省編輯局長となり、1886(明治 19)年まで文部省の編纂事業で活躍した。文部省『百科全書』の翻訳プロジェクトでは、箕作麟祥とともに中心にかかわった人物である。また、森有礼からの提案を受けて明六社の結成にも尽力している。生年は1828(文政 11)年、没年は1902(明治 35)年である。

西村茂樹訳「天文学」の原著(起点テキスト=Source Text [ST])冒頭とそれに該当する翻訳テキスト(目標テキスト=Target Text [TT])は、次の通りである。引用に際して、原則として旧漢字は新字体に、合字・変体仮名は通常の字体に改めている。

【ST】

ASTRONOMY teaches whatever is known of the heavenly bodies. The earth itself it regards only as one of them – viewing it as an entire body, such as it would appear were we to behold it from a sufficient distance.

The subject falls naturally under two general heads: 1st, A description of the heavenly bodies – the aspect of the heavens as a whole; the distance, shapes, and magnitudes of the several bodies; the figures they describe in their motions; the way in which they are grouped into systems, &c. 2d, Physical Astronomy, or the nature of the powers or forces that carry on the heavenly motions, and the laws that they observe. The processes of calculating the motions from a knowledge of the laws, with a view to turn them to the use of man, and the management of mathematical instructions for taking the necessary observations, form the art of the practical astronomer; into which we cannot enter.

【TT】

○天文学ハ原語ヲ「アストロノミイ」ト謂フ総テ天上ニ現ハルハ所ノ諸象ヲ教フルノ学ナリ吾儕カ居住セル地球ノ如キモ亦天上諸象ノ其一ナリ蓋シ吾儕地球ニ住スルノ人若シ遠ク地球ヲ離レテ之ヲ望ムトキハ其全体ヲ見ルコトヲ得ベクシテ其形タル必天上ノ諸象ト豪モ異ナルコトナカルベシ

○天文学ハ其全局自ヲ分レテ二綱領ト為ル第一綱ハ天上諸象ノ誌ニシテ諸象ヲ合セテ天ノ全体ト為シテ之ヲ論シ或ハ諸象ノ距離形状大小ヲ説キ或ハ其運行ノ状ヲ記シ或ハ位置配合ノ法ヲ録スル等ノ如キ是ナリ第二綱ハ推理ノ天文ニシテ天上諸象ノ運行ヲ為ス所以ノ力其運行ニ就テ考フル所ノ自然ノ法則等ノ如キ是ナリ又自然ノ法則ニ據リテ運行ヲ算スルノ方法観察ヲ為スニ要須ナル器械ノ用法等ノ如キハ之ヲ実学ノ天文ト名ケ此書ニ於テハ之ヲ論学セズ

TT に付けられた「○」印の記号は、原著のパラグラフ(段落)に対応しており、「段落」という制度を翻訳者が明確に意識していた形跡である。つまり、抄訳や翻案ではなく、原文との対応を前提とした翻訳行為を自覚した印である。日本語における「段落」は、このように翻訳を通して、西洋語のパラグラフに対応する形で発見された。ただし、文部省『百科全書』全編を通して、このような○印段落システムが採用されているのは本編「天文学」のみであり、他の翻訳者や校正者には明示的に用いられていない(が、段落の改行はほぼ忠実に実行されている)。

明治期の翻訳に漢語が多用されていることは、これまでも指摘されている(森岡編, 1969; 佐藤, 1986; 高野, 2004 など)。主として国語学で研究されてきたように、それらは漢籍からの借用もあれば、新造語もある。しかしここで重要なのは、それらの漢語が西洋語からの翻訳プロセスで選択されたという点だ。翻訳行為によって何がもたらされたのかを、翻訳研究の視点で捉え直してみる必要があるだろう。旧来から存在していたか、創作された新語かの如何を問わず、翻訳語としての漢語が過去を切断し、新たに現前したのである。単に語彙の増加という現象ではない

のだ。この問題は柳父章が日本における翻訳論を展開するなかで述べてきた論点のひとつである。

翻訳語の成立の歴史について考えるとき、これを単にことばの問題として、辞書的な意味だけを追うというやり方を、私はとらない。ことばを、人間との係わりにおいて、文化的な事件の要素という側面から見ていきたいと思う。とりわけ、ことばが人間を動かしている、というような視点を重視したい。

(柳父, 1982, p. 47)

柳父が指摘するように、翻訳語は「意味の乏しいことば」である。しかも翻訳語は、翻訳における起点言語と目標言語という関係から、常に異国のことばと相互参照される。そしてそこには、等価という幻想が潜んでいる。翻訳行為は等価を前提として、異言語を日本語に翻す。翻訳という言語行為は幻想としての等価を生み出す出来事なのである。

例えば、TT の「天文学ハ原語ヲ「アストロノミイ」ト謂フ」の部分には対応する ST はなく、一種の訳注のようなものであるが、こうして定義する翻訳の言語行為が「天文学」を「アストロノミイ」の定訳として宣言していることになる。また、「アストロノミイ」のカタカナ表記とそれを囲むカギ括弧も斬新な用法であり、読者はこの語に注目せざるを得ないだろう。文部省『百科全書』は全編にわたり随所に、ST の鍵概念を TT では原音カタカナ表記する方略が認められるが、言語行為のパフォーマティブな性質を鑑みれば、西洋語の音声を擬態したカタカナ語で漢語を定義することによる既成事実化は指摘しておかねばならない。

ところで「天文学」というタイトルは、刊行前には「星学」と予告されていたが、実際の刊行時に変更されたものである⁵。この変更の理由は不明だが、「天文」という語は、古くは『日本書紀』に登場する漢語であり、江戸幕府の職名としても「天文方」（若年寄に属し、天文・暦術・測量・地誌・蘭書の翻訳などを担当）があったことは周知の通りである。「天文学」という語は、福沢諭吉『西洋事情初編』（1866）においても使用例が認められるし、その他に西周、馬場辰猪、田口鼎軒、江見水蔭、三宅雪嶺、杉浦重剛、植村正久、夏目漱石、加藤弘之、清野勉、境野黄洋などが同時代に用いている（『明治文学全集 総索引』参照）。例えば、夏目漱石『夢十夜』（1908 [明治 41]）の「第七夜」には次の件がある。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知っているかと尋ねた。自分は詰らないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。黙っていた。するとその異人が金牛宮の頂にある七星の話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだといった。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙っていた。

⁵ タイトルの変更としては、他にも同様の事例がある。また、箕作麟祥訳は「教導説」として一旦刊行された後に「教育論」に変更されているが、変更理由の説明は残されていない。

そもそも「天文学」とは、西洋という「異人」から学んだ知識というイメージなのである。辞書の訳語としては、Hepburn(ヘボン)『和英語林集成』のASTRONOMYの項は、初版(1867[慶応3])では「Temmon」、再版(1872[明治5])では「Temmon, sei-gaku」、3版第1種本(1886[明治19])では「Temmongaku, seigaku」となっている。

さらに単語レベルで注目されるものとして、「天上」と「地球」を取り上げておこう。「天上」と数回訳されているのは、heavenly bodies / bodies / heavenly などが対応する。これらの英語の訳語に「天体」ではなく「天上」が選択された理由は、the earth の訳語である「地球」が、「吾儕カ居住セル地球」「吾儕地球」というように一人称複数の「吾儕」を伴っていることと無関係ではあるまい。西村茂樹は西洋天文学を知識としては知っていたであろう。同時代の福沢諭吉『文明論之概略』(1875)は「此有様はもと地球と他の天体と相対して地球の動くがために生じたる現象なるゆゑ」(強調引用者)として、「天体」と「地球」の関係を地動説的に説明している。江戸期には通詞の本木良永が『和蘭地球図説』『天地二球用法』で地動説を日本に紹介し、志筑忠雄が『暦象新書』でケプラーの法則やニュートン力学に言及している。司馬江漢も『和蘭天説』で地動説などの西洋天文学を紹介し、星図『和蘭天球図』を作成した。また、江戸幕府は西洋天文学に基づいた寛政暦を完成させ、その後天保暦に改暦している。とはいえ、西村が「天体」よりも「天上」という語を選び、「地球」には一定の修飾語を付ける慎重さには、読者という存在への意識も窺われる。天体と地球の地動説的關係は当時人々の実感としてはどうであったのか。旧来の木版から活版印刷への移行による書物数の増加、また1872(明治5)年の学制発布による教育制度の整備などが近代読者を誕生させた。翻訳者はそのような読者に向けて翻訳行為を遂行する。一人称「吾儕」が地球から仰ぎ見る天上は読者の視線と交錯し、翻訳文体の受容へと誘導したのではないか。

ASTRONOMY teaches は無生物主語が動作主となる構文であるが、TTでは2つの文となり、全体としては「天文学ハ～教フルノ学ナリ」と少しずらされて再現されている。「天文学ハ」という無生物主語はセンテンスを越えて第2文で復元可能であるが、述語は「教ヘル」ではなく「学ナリ」である。だが、「天文学ハ～教フル」と一旦は読むこともでき、その後に「ノ学ナリ」が付加されているとも言える。刹那的な瞬間とはいえ、一時的に無生物主語「天文学ハ」が「教フル」という関係性が成立する読みが生じ、錯覚を誘発する構造だ。

法(mood)について注目しておくとして、were we to behold it from a sufficient distance が、「若シ遠ク地球ヲ離レテ之ヲ望ムトキハ」と訳出されている。当時、地球を離れるなどということは空想以外の何物でもない。これは仮定法過去(反現実)である。訳文は「若シ～望ムトキハ」として「若シ」で条件節にしてはいるが、それを受けた「望ムトキハ」にどこまで反現実性が感じられるだろうか。日本語では、直説法と仮定法を叙法として明確に区別できない。そこで a sufficient distance 「十分な距離」という名詞表現を「遠く離れて」という動詞表現に転換することで、少しでも反現実性を出していると考えられる。

さて、センテンスという単位を越えたテキスト形成的分析に移ろう。2段落目冒頭の the subject は、TTでは「天文学」と明示的にされている。これは、英語と日本語における結束性の差異と、翻訳における明示化の両面から説明できるだろう。つまり、同じ語の反復を嫌い代名詞な

どが用いられる英語に対して、日本語では代名詞よりも反復が好まれる傾向にあること、しかも、翻訳行為には the subject が具体的に指しているものを astronomy と明示的に解釈するプロセスが伴うということである。

two general heads が「二綱領」に、1st と 2d が「第一綱ハ」と「第二綱ハ」に対応して、テキストの展開を忠実に再現している。現代の用法では「第一(に／は)」「第二(に／は)」に相当する、このような文の展開の仕方は、いつごろから定着し出したものであろうか。「第」を接頭語的に「数を示す語について物事の順序を表わす」(『日本国語大辞典 第二版』)という使い方であれば、『枕草子』に「除目に第一の国得たる人」とあり、ロドリゲス『日本大文典』(1604-1608)では「順序を意味する名詞は、基数名詞から三通りの方法によって作られる」「上述の基数名詞の前に助辞 Dai(ダイ)を置く。例、Daiichi(ダイイチ)、daini(ダイニ)」と説明している。さらに古く漢籍『論語』にも「学而第一」とあるように、「第」と数字の組み合わせは伝統的な用法と見てよい。だが、テキスト形成的な「第一」「第二」という使い方とは明らかに異なる。このように序数を用いて文を展開する方法は、学術的なテキストの特徴のひとつとして、近代日本語が翻訳から影響を受けたものと思われる。

その後続く第 2 段落後半の、The processes of calculating the motions from a knowledge of the laws, with a view to turn them to the use of man, and the management of mathematical instructions for taking the necessary observations, form the art of the practical astronomer; into which we cannot enter.と、対応する訳文「又自然ノ法則ニ據リテ運行ヲ算スルノ方法観察ヲ為スニ要須ナル器械ノ用法等ノ如キハ之ヲ実学ノ天文ト名ケ此書ニ於テハ之ヲ論学セズ」を詳細に見てみよう。ST は the processes of calculating the motions from a knowledge of the laws (名詞化された抽象的内容の主部)... form (述部)、という構造で主述が離れた長い一文である。しかしながら、これをほぼ忠実に訳出した TT の日本語は、さほど読みづらいものとなっていない。これはどのような理由によるのであろうか。この部分を含め、第 2 段落全体の ST と TT を対比させると、次のようにほぼ順送りに対応することが分かる。

[ST and TT in parallel]

The subject falls naturally under two general heads:

天文学ハ其全局自ヲ分レテ二綱領ト為ル

1st, A description of the heavenly bodies

第一綱ハ天上諸象ノ誌ニシテ

– the aspect of the heavens as a whole;

諸象ヲ合セテ天ノ全体ト為シテ

the distance, shapes, and magnitudes of the several bodies;

諸象ノ距離形状大小ヲ説キ

the figures they describe in their motions;

其運行ノ状ヲ記シ

the way in which they are grouped into systems, &c.

位置配合ノ法ヲ録スル 等ノ如キ是ナリ
 2d, Physical Astronomy,
 第二綱ハ推理ノ天文ニシテ
 or the nature of the powers or forces that carry on the heavenly motions,
 天上諸象ノ運行ヲ為ス所以ノ力
 and the laws that they observe.
 其運行ニ就テ考フル所ノ自然ノ法則 等ノ如キ是ナリ
The processes of calculating the motions from a knowledge of the laws,
 又自然ノ法則ニ據リテ運行ヲ算スルノ方法
 with a view to turn them to the use of man, and
 the management of mathematical instructions
 for taking the necessary observations,
 観察ヲ為スニ要須ナル器械ノ用法 等ノ如キハ
 form the art of the practical astronomer;
 之ヲ実学ノ天文ト名ケ
 into which we cannot enter.
 此書ニ於テハ之ヲ論学セズ

下線部の訳語がほぼ対応する英語を並べると、「誌ニシテ」= a description、「為シテ」= the aspect、「説キ」= 0、「記シ」= the figure、「録スル」= the way となり、名詞を開いて動詞に品詞転換(あるいは追加)している。そして最終的には、「等ノ如キ是ナリ」に収斂している。このように動詞を続ける形で、日本語が英語テキストの名詞の連続に対応しているのである。observe が 2 度目は observations と名詞化されており、この部分は「考フル」「観察」と訳出している。ただし、taking the necessary observations では「観察ヲ為スニ要須ナル」となり、現代語に置き換えれば「必要な観察」ではなく「観察を必要とする」とずらしていることが分かる。the processes of calculating the motions from a knowledge of the laws「自然ノ法則ニ據リテ運行ヲ算スルノ方法」に後続する部分は、再び「等ノ如キハ」に収斂する形で長い主部を処理し、form「名ケ」につなげ、into which は順送りの訳としている。

[Theme/Rheme, Lexical Cohesion]

天文学ハ其全局自ヲ分レテ二綱領ト為ル
 第一綱ハ 天上諸象ノ誌ニシテ | 諸象ヲ合セテ天ノ全体ト為シテ | 之ヲ論シ | 或ハ諸象ノ距離形状大小
 ヲ説キ | 或ハ其運行ノ状ヲ記シ | 或ハ位置配合ノ法ヲ録スル | 等ノ如キ是ナリ
 第二綱ハ 推理ノ天文ニシテ | 天上諸象ノ運行ヲ為ス所以ノ力 | 其運行ニ就テ考フル所ノ自然ノ法則 |
 等ノ如キ是ナリ
 又自然ノ法則ニ據リテ | 運行ヲ算スルノ方法 | 観察ヲ為スニ要須ナル器械ノ用法 | 等ノ如キハ | 之ヲ実
 学ノ天文ト名ケ | 此書ニ於テハ之ヲ論学セズ

主題と題述 (Theme/Rheme) の展開と語彙的結束性に注目してみると、two general heads「二綱領」、1st「第一綱ハ」、2d「第二綱ハ」という展開は先に指摘した通りである。「第二綱ハ」の Rheme (題述) 部分「天上諸象ノ運行ヲ為ス所以ノカ 其運行ニ就テ考フル所ノ自然ノ法則」の要素が次の Theme (主題) 部分と語彙的結束性を維持している。この中には observe→observations の名詞化も含まれている。

observation の訳語として「観察」が用いられているので、この抽象名詞について解説しておく。森岡編 (1969, pp. 126-138) では、1877 (明治 10) 年に刊行された西周訳『利学』(John Stuart Mill (1861) *Utilitarianism* の翻訳) における訳語を論ずる中で、西周の以前と以後の辞書における訳語の推移をまとめている。そして全体として「西周以後の辞書が西周の用語を多く採用していることはきわめて明白」と結論づけるのである。

表 2: 森岡編 (1969, p. 137) の第 28 表より「observation」のみを抜粋⁶

	observation
『ロブシャイド英華字典』(1869)	見者
『英和对訳袖珍辞書』(1862)	目付
『和英語林集成』(1867)	ミルコト ⁷
『英和字彙』初版 (1873) ⁸	注目
西周『利学』(1877)	観察
『英和字彙』再版 (1882)	観察
『和訳英字彙』(1888)	観察
『和訳字彙』(1888)	観察
『新簡約英和辞典』(1955)	観察

ここで問題としなければならないのは西村茂樹訳「天文学」や西周訳『利学』で使用された訳語「観察」の誕生とその後の継承である。かつては「かんざつ」とも読まれたこの語彙は、本来仏教用語として「智慧によって対象となるものを正しく見きわめること」(『日本国語大辞典 第二版』)であり、『往生要集』『浄土論』など仏典や漢籍では仏教用語「観察」が用いられてきた。そして、この語義から「物事をよく見て、推察すること。また、見て察すること」という意味が派生する。したがって「明治期に入っても、加藤弘之『立憲政体略』(1868)の「去歳我旧幕府時勢を観察して政権を天朝に帰納せられしより万機一新公明正大の政体を起し玉ふ」の使用例はこの意味である。だが、開化期には新しい意味が立ち上がった。例えば『百学連環』(1870-71)における

⁶ 補足すると、ス維爾士維廉士 (ウィリアムズ) 『英華字彙』(1869) には observation のエントリーはないが、observe は「観視スル、知覚スル」である。

⁷ 『和英語林集成』の OBSEVATION の項は、初版 (1867 [慶応 3]) は「Me, miru」、再版 (1872 [明治 5]) は「Miru koto, okonai, mamorukoto, me」、3 版第 1 種本 (1886 [明治 19]) は「Miru koto, okonai, mamoru koto, me」である。

⁸ ただし『英和字彙』(1873) の observe は、「観察スル」である。

西周「総論」では、「又 theory(観察上)、practice(實際上)、学に於ても又術に於ても、観察、實際共になかるべからず」とある。これは observation ではなく theory の訳語としてではあるものの、「事物のありのままの現象を注意深く見きわめ、客観的な知識を得ること」という意味へと移行した「観察」の誕生であり、「明治以降、科学的な学問の方法態度の浸透・定着によって獲得された意味と考えられる」(『日本国語大辞典 第二版』)のである。この点で、国木田独歩が 1898(明治31)年に『国民之友』に発表した「死」において、「自分の心理的傾向を反省し併せて諸人の挙動を観察して」と書いたときには、翻訳語「観察」が自覚されていたはずである。近代的「観察」の意味での国語辞書における初出は、1907年の金沢庄三郎『辞林』まで待つことになるのだが、このような翻訳語の定着は、過去と続いているような錯覚で過去を切断する。

4.2 大槻文彦訳「言語」の分析

青史社刊行の復刻版には「明治12年3月文部省印行」⁹とあり、底本は第5版の Language である。1884(明治17)年刊行の丸善3巻本には収録されていない。本編を翻訳した大槻文彦は国語学者であり、1891(明治24)年に日本初の近代的国語辞書『言海』を完成出版したことで著名な人物である。大槻磐溪の三男で、生年は1847(弘化4)年、没年は1928(昭和3)年である。

大槻文彦訳「言語」の原著(起点テキスト=Source Text [ST])冒頭とそれに該当する翻訳テキスト(目標テキスト=Target Text [TT])は、次の通りである。引用に際して、原則として旧漢字は新字体に、合字・変体仮名は通常の字体に改めている。また、左ルビは後続の括弧〔 〕内に入れた。

【ST】

LANGUAGE in its widest sense signifies any means by which one conscious being conveys what it thinks or feels to another. Thus we speak of the language of the eyes, the language of birds. But in ordinary usage we understand by language the system of sounds uttered by the human voice in the intercourse of society – articulate speech. The writing of language does not alter its character in this respect; it only introduces an intermediate set of signs or marks. The written characters do not convey the meaning directly, they only indicate certain sounds; and it is these sounds that are still the immediate vehicle of the thoughts. It is language in this sense – the communication of our thoughts by means of spoken signs – that is the subject of the present paper.

Human speech is the result of a kind of tacit convention as to the meanings of the several signs, so that they are intelligible only to those who have learned them. Such signs are in this respect *artificial*. But distinct from this there is a kind of *natural* language which is universally lower animals to some extent possess. It is made up of the instinctive and

⁹ この刊行年は誤記であると思われる。「言語」が丸善版に収録されなかったのは、翻訳が間に合わなかった可能性が高い。明治19年刊の有隣堂版合冊本には収められている。

untaught movements of the body that feelings, passions, and desires give rise to. These natural, outward signs of inward mental states consists of the tones of the voice, the play of the features, the movements of the limbs, and the gestures of the body. Every conspicuous passion or emotion gives a distinct expression to these various organs, by putting them into the state most in harmony with itself; and each different expression tends, by an instinctive operation of fellow-feeling, to call forth its proper emotion in those who witness it.

【TT】

総論

言語〔ランゲージ〕トイフモノハ之ヲ概論スレバ知覚アルー生類ノ其思考シ或ハ感覺スル所ノモノヲ他ニ伝致スル方法ノ泛称トス譬ヘバ吾人常ニ眼ノ言語^{目ニテ相視テ意ヲ通ズルナリ}或ハ鳥ノ言語ト言フガ如シ然レドモ通常ノ意義ニテハ言語トハ人類ノ交際上ニ於テ人声ニテ談話スル所ノ諸音ノ集合セル者ヲ謂フナリ又言語ヲ書ニ筆スル時ニ至リテハ其性質隨テ変ズベシヤト問ハニ決シテ然ラズ此際ニ於テハ中間ニアリテコレヲ媒介スル記号ノ列序ヲ加フト雖ドモ然レドモ言語ノ意味ヲ伝通スル者ハ其記号ニアラズシテ尚其音ニ在ルナリ今茲ニ言語トイフ意義ハ此意義即チ説話ノ記号ニ由リテ吾人ノ思想ヲ他ニ通ズルノ謂ヒニシテ此篇中説ク所ハ即チ此旨趣ナリ

蓋シ人ノ言語ハ種々ノ記号ヲ製シテ其意味ヲ默定シタル結果ニシテ此記号ハ唯之ヲ学ビタル者ノミ理會スルヲ得ベキ者ナレバ固ヨリ人作ニ係ル者ナリ然レトモ之ト全ク異ナリタル自然ノ言語アリ 此言語ハ学バズ知ラズシテ自然ニ了解スルコトヲ得ベク最下ノ動物ニ至ルマデモ多少所有スルモノニシテ即チ我ガ喜怒哀楽ノ情我ガ欲悪嗜好ノ念ノ発スルヨリ教ヲ待タズシテ知ラズ識ラズ身体ヲ挙動スルニ起リ音声ノ調子、容貌ノ風采、四肢ノ運動及ビ身体ノ挙動ニ因リテ成ルモノトス凡ソ情欲ノ発動スル時ハ是等ノ機関ノ状態ヲ変ジテ以テ其発情シタル事状〔コトガラ〕ト善ク調和セシメ而シテ其機関ノ状態ノ變動スル時ハ同情相感ズル自然作用ニ因リ之ヲ目撃スル者ヲシテ自然ニ之ト相応ズル情ヲ提起セシムル者トス

書名の「言語」は Language の訳語であり、本文にも「言語」という語が頻出する。この語は古く漢籍にもあるが、わが国では江戸時代までは漢音の「ゲンギョ」と呉音の「ゴンゴ」があり、明治に入って両語形が混交して「ゲンゴ」になったという。その後「ゲンゴ」が一般化して来ると、「ゲンギョ」は消滅し、「ゴンゴ」は「言語道断」など慣用表現のみに使用されることとなった(『日本国語大辞典 第二版』参照)。明治期の「言語」の使用例としては上田萬年以外には、神田孝平、中村正直、三遊亭圓朝、福地櫻痴、小野梓などが用いている程度である(『明治文学全集 総索引』参照)。このために、夏目漱石『吾輩は猫である』(1905-06)における「吾輩は猫属の言語を解し得る位に」(強調引用者)という表現には、新鮮な響きも残余していたと想像される。漱石の用いた「言語」は、「ゲンギョ」でも「ゴンゴ」でもなく、すでに「ゲンゴ」と読まれるべく翻訳語であったはずだ。『和英語林集成』の LANGUAGE の項は、初版(1867 [慶応 3])では「Kotoba, monoii」、再版(1872 [明治 5])では「Kotoba, monoii, go」、3 版第 1 種本(1886 [明治 19])は再版と同様

であり、いずれも「言語」を入れていない。同辞書の和英の部には、初版には「言語」に相当するエントリーはなく、再版には GEN-GIYO の項に「ケンギヨ、言語、n. Same as Gon-go」とあり、3 版第 1 種本では GEN-GYO, or GENGO となり「ゲンゴ」という読みが登場するが、その説明は再版と同じで「ケンギヨ、言語、n. Same as Gon-go」と続く。1884(明治 17)年の羅布存徳(ロブシャイト)原著・井上哲次郎訂増『増訂英華字典』でも「話、語」のみである。1869(明治 2)年のス維爾士維廉士(ウィリアムズ)『英華字彙』にはすでに「話、言語」とあるが、その読み方については定かではない。なお、1886(明治 19)年に帝国大学文科大学に設立された「博言学科」が、その後「言語学科」と改称されるのは 1900(明治 33)年である。1898(明治 31)年には「言語学会」(会長は上田萬年)が創設され、その 2 年後の 1900(明治 33)年に学会の機関誌として『言語学雑誌』が創刊された。西洋近代から訳された「言語」という語の普及が想像できよう。

このような状況を踏まえると、本編冒頭の「言語[ランゲージ]トイフモノハ」という表現の「トイフモノ」には「言語」という翻訳語それ自体への特別な扱いが要請されていること、つまり「言語ハ」とストレートに主題化できない躊躇いが伝わってくる(「ランゲージ」は「言語」の左ルビ)。藤井貞和は次のように述べて、「～というもの」における抽象性を問題にする。『『もの』は、〈動かない〉を基本とする。たとえばかな文字を話題にするときに、『かなというものは～』と言うと、目のまえの仮名文字ではなく、あたまのなかで描く概念であり、抽象的な〈かな〉だ。描かれた概念はじっと動かない。その場合、『～というもの』という言い方になる』(2010, p. 4)。廣松渉は構文という観点からこの問題に触れている。

日本語の「何々ハ何々ナリ」という命題範式にあつては、主語はあらかじめ名詞化されていなければならない、たとえ名詞化されていても、日常的な表現では全称・特称の別が必ずしも分明ではないという難点がある。この難点を免れるためには、例えば、白さというものは……、白いということは……、という形の範式、すなわち

○○というモノは……である

××というコトは……である

という構文図式に“代入”して弁別・整序するのが最善であろう。この範式では、主語の名詞化ならびに全称性の要求が適えられる。のみならずまた、あらゆる語彙・成句・文章(で表わされるものごと)が、範式中の○○または××に代入される。

(廣松, 2007 [1997], p. 26)

廣松の焦点は命題を示す「～ハ～ナリ」の形式にあるが、その場合に主語の名詞化を問題化している。他方、柳父章は翻訳語「存在」を論ずるなかで、述語「である」に注目する。

being や Sein などの西欧語と、「存在」ということばには、重要な違いがある。being の動詞形 be は、I am. すなわち、私がある、という意味で使われるとともに、I am a boy. すなわち、私は少年である、という意味でも使われる。前者の「がある」は、ふつうに言う「存在する」の意味で、哲学における「存在」論のテーマである。後者の「である」は連辞 copula であり、主語

と述語を結ぶ働きをもつ。これは「人間は動物である」というような文全体の持つ意味として、論理学の問題とされている。be には、この二つの意味があるのだが、「存在する」ということばには、前者の意味だけで、後者の意味はない。(強調原文)

(柳父, 1982, p. 112)

柳父は和辻哲郎を批判的に引用しながら、「である」は西洋語の連辞を翻訳するために作られた日本語なのだと指摘する。

「之ヲ概論スレバ」「譬へバ〜(如シ)」「目ニテ相視テ意ヲ通ズルナリ」には原文に対応する語句がなく、口語的な言い回しが「言語」を説明するために付加されている例である。また、「目ニテ相視テ意ヲ通ズルナリ」は「眼ノ言語」を翻訳者が注釈するものであり、割注という制度の使用例である。

「泛称トス」は *in its widest sense signifies* の訳出である。「泛称」(はんしょう)とは、広くひっくるめていうことや総称の意であり、ST の「*in its widest sense* (副詞句) + *signifies* (動詞)」を漢語一語で簡潔に訳出していることになる。また漢文的な用法という点で言うならば、「知覚アル一生類ノ其思考シ或ハ感覺スル所ノモノヲ他ニ伝致スル方法」における「所ノモノ」が挙げられる。この部分は *any means by which one conscious being conveys what it thinks or feels to another* に対応し、ST と TT がほぼ一対一に対応する周密的な翻訳である。ここで「所ノモノ」は *what* の訳出であり、「方法 (means)」が長い修飾語を伴う構造の名詞群が日本語でも再現されている。by which 以下の関係節が訳し上げられているので、このように不自然に長い日本語の名詞群が出現することになった。

漢文的な言い回しである「所ノ」は、「通常ノ意義ニテハ言語トハ人類ノ交際上ニ於テ人声ニテ談話スル所ノ諸音ノ集合セル者ヲ謂フナリ」においても用いられている。これは ST の *in ordinary usage we understand by language the system of sounds uttered by the human voice in the intercourse of society* が対応する。ここでは「言語トハ」を主語にした構文に転換し、「言語 (language)」と「諸音ノ集合セル者 (the system of sounds)」を結び付けて定義している。*in the intercourse of society* を「人類ノ交際上ニ於テ」と訳出し、「所ノ」の使用によって *uttered* 以下が *the system of sounds* を後置修飾している英語の構造が日本語でも再現されている。ただし *sounds* を「諸音」として複数形まで精密に表している一方で、*system* を「集合セル者」と説明的な訳出とせざるを得なかった状況も考慮しておかねばならない。仮に *system* を「システム」と訳しても未知の概念を理解したことにはならないだろう。『和英語林集成』では、初版「Dō; riu; riugi; michi; shidara; shidai」(1867 [慶応 3])、再版「Dō, riu, riugi, michi, shidara, shidai」(1872 [明治 5])、三版第 1 種本「Dō, riu, ryūgi, michi, shidara, shidai, kei, hōshiki」(1886 [明治 19])。『訂増英華字彙』(1884 [明治 17]) では「n. An assemblage of things adjusted into a regular whole, 法、法式、総法、総理、次序之事; system of government, 政法、治法、大卞、制法、制度; the solar system, 日動之理; to strengthen the system, 補血」、またスウェーデンのウィリアムズ『英華字彙』(1869 [明治 2]) には *system* のエントリーすらない。これらの辞書的訳語のいずれも、うまく当てはまらないのである。

類似の問題を提示しているのが、*the writing of language does not alter its character in this respect* と「又言語ヲ書ニ筆スル時ニ至リテハ其性質随テ変ズベシヤト問ハンニ決シテ然ラズ」である。*the writing of language* という名詞群としての主部が、「言語ヲ書ニ筆スル時ニ至リテハ」と節に解かれている。*the writing of language* には、「言語を書くこと」「言語で書いたもの」「文書」「書記言語」「書き言葉」など様々な概念が包摂されている。このために対応する日本語は現代においてもないと言える。あえて探すと、「エクリチュール」というフランス語由来のカタカナ語に遭遇するかもしれない。だが仮に「エクリチュールはこの点で言語の特性を変えない」と訳出したとしよう。この日本語には違和感が残るはずである。そこで後半を見てみよう。*does not alter its character* は、「其性質随テ変ズベシヤト問ハンニ決シテ然ラズ」という自問自答の対話形式で訳出されている。全体としては ST の単文が、TT では 4 つの節の複合となっている¹⁰。この文体自体は漢文調ではあるが、問答という口語的な形式に変更しているのである。ここでは、抽象名詞と無生物主語を回避した結果としての漢文的口語という複雑な産物なのである。

接続語句は結束性の点から重要である。この点でも漢文の助字が多用されているが、英語の対応が必ずしもあるわけではない。例えば、「然レドモ」、「又」、「然レドモ」、「蓋シ」、「固ヨリ」、「然レドモ」、「即チ」、「而シテ」において英語との対応関係を見ると(非対応を 0 とする)、*thus* = 0、*but* = 「然レドモ」、0 = 「又」、0 = 「然レドモ」、0 = 「蓋シ」、0 = 「固ヨリ」、*but* = 「然レドモ」、0 = 「即チ」、*and* = 「而シテ」となる。TT では ST に比べて、接続語句が倍に膨張している。これらがすべて漢文の助字であるために、訳文全体として漢文調の印象を強くする一因となっていると指摘できよう。

しかしだからと言って、漢文訓読的な訳し上げばかりではないことにも注目しておかねばならない。*But distinct from this there is a kind of natural language which is universally lower animals to some extent possess.* は、「然レドモ之ト全ク異ナリタル自然ノ言語アリ此言語ハ学バズ知ラズシテ自然ニ了解スルコトヲ得ベク最下ノ動物ニ至ルマデモ多少所有スルモノニシテ」と訳されている。*which* の前で文をいったん切り、順送りの訳にしているのである。このように原文における情報の流れを維持する訳出は、テキスト的等価のための、もうひとつの「直訳」への志向ともいえる。

4.3 佐原純一訳・原弥一郎訳「幾何学」の分析

丸善版では新たな訳者による差し替えが 6 編あること、先述の通りである。その際には底本となった原著も第 4 版から第 5 版に変更されているため、差し替え版は修正というよりも別の翻訳と考えてよい。ただし、*Geometry* については、その冒頭から 2 段落目までは第 4 版と第 5 版で原著に変更点がなく、このために、佐原純一訳は第 4 版を、原弥一郎訳は第 5 版を各々底本としているが、少なくとも冒頭部分に関しては結果として同一の起点テキストを翻訳していることになる。本稿ではこのような特殊性を鑑みて、「幾何学」のテキストを取り上げる。

¹⁰ 機能言語学的な観点では、節複合における節間の関係に *expansion* 「拡充」と *projection* 「投射」という 2 つの選択体系を考える (Halliday, 1994)。例えば、「①又言語ヲ書ニ筆スル時ニ至リテハ | ②其性質随テ変ズベシヤ | ③ト問ハンニ | ④決シテ然ラズ」では、②と③が投射の関係、あとは拡充の関係である。

旧版の第4版 Geometry の訳者、佐原純一は、大槻文彦『箕作麟祥君伝』の談話に登場するインフォーマントであり、その中で文部省『百科全書』についても言及している人物である。この関連で『明治事物起原』でも佐原の談話を引用しながら、「百科全書の賃訳」を説明している箇所がある。佐原純一は生年没年不詳であるが、明治4年頃に文部省編輯寮大属となり、文部省『百科全書』の「算術及代数」と「幾何学」といういずれも数学関連の2編を担当している。

第5版 Geometry の訳者、原弥一郎についての詳細は不明だが、文部省『百科全書』の丸善版から新たな翻訳者として加わり、「幾何学」と「経典史」を底本の版を改めて担当している。『欧米大家政治格言』(郁文堂, 1882 [明治15])、『獄中憂憤余情』(1882 [明治15])、『国民英学会英文集』(国民英学会, 1888 [明治21])などの編者であることから、数学の専門家ではないと推測される。

Geometry (起点テキスト=Source Text [ST]) の冒頭とそれに該当する2つの「幾何学」(目標テキスト=Target Text [TTa] [TTb]) は、次の通りである。引用に際して、原則として旧漢字は新字体に、合字・変体仮名は通常の字体に改めている。また、左ルビは後続の括弧〔 〕内に入れた。

【ST】

GEOMETRY (from two Greek words signifying the *earth* and *to measure*) is that branch of mathematical science which is devoted to the consideration of form and size, and may therefore be said to be the best and surest guide to the study of all sciences in which ideas of dimension or space are involved. Almost all the knowledge required by navigators, architects, surveyors, engineers, and opticians, in their respective occupations, is deduced from geometry and other branches of mathematics. All works of art are constructed according to the rules which geometry involves; and we find the same laws observed in the works of nature. The study of mathematics, generally, is also of great importance in cultivating habits of exact reasoning; and in this respect it forms a useful auxiliary to logic.

It has been frequently asserted, though apparently with little foundation, that geometry was first cultivated in Egypt, in reference to the measurement of the land. Thales of Miletus, who lived about 600 B.C., is among the first concerning whose attainments in mathematical knowledge we have any authentic information. Plato made several important discoveries in mathematics, which he considered the chief of sciences. A celebrated school, in which great improvement was made in geometry, was established about 300 B.C. To this school the celebrated Euclid belonged. In modern times, Kepler, Galileo, Tacquet, Pascal, Descartes, Huygens of Holland, our own Newton, Maclaurin, Lagrange, and many others, have enlarged the bounds of mathematical science, and have brought it to bear upon subjects which, in former ages, were considered to be beyond the grasp of the human mind.

【TTa】佐原純一訳

幾何学〔ジオメトリー〕(ジオメトリートハ即チ測地ノ義ニシテ原ト希臘ノ二語ヨリ出テタルモノナリ)ハ数理学中専ラ物ノ形体及ヒ大小ヲ講究スルノ一科ナリ故ニ凡ソ物ノ長短広狭厚薄ニ関スルノ諸学ヲ修ムルニハ此学実ニ之カ至精至確ヲ示スノ善東道者トモ称ス可シ即チ航海家、造営家、測量士、工学士、光学ヲ修ムルノ輩等各自其職分ニ於テ講明セサル可カラサル所ノ諸学ハ大約其源ヲ幾何学ニ発セサルハナク然ラサルモ猶他ノ数理学中ノ一科ヲ以テ基礎トセサルヲ得ス況ンヤ特ニ工芸上ノ諸物ヲヤートシテ矩獲ヲ幾何学ニ取テ製作セサルモノナシ且夫レ天造物ニ就テ之ヲ察観スルモ亦自ラ此学ノ法則ニ由テ成レルモノ多キヲ見ル故ニ総テ数理学ヲ講明スルノ事ハ遍ク事物ノ理ヲ精確ニ推論スルノ習練ヲ養ハシムルニ甚タ緊切ナルモノナリ試ミニ論理〔ロジック〕学ヲ看ヨ数理学実ニ之ヲ補賛シテ始メテ其完キヲ成スニ非スヤ

幾何学ハ在昔埃及国ニ於テ地面ヲ丈量センカタメニ施セシ方ヲ以テ其濫觴トナセルコト古来所伝ノ通説ナリ然レトモ此説亦未タ確タル基礎ヲ以テ憑証トナセルニ非サルコト明ケシ蓋シ紀元前凡ソ六百年ノ頃ロミレテユスニセーリスト云ヘル人アリテ既ニ頗ル数理学ニ熟達セシト云フ実ニ氏ハ吾人カ真正ノ旧記ニ拠テ数理学者ノ一人ト定ムル所ナリ又プラトハ当時早ニ数理学ヲ以テ諸学中ノ首要ナルモノト考定シ此学科ニ就テ種々緊要ナル發明ヲナセシ人ナリ則チ後紀元前大約三百年ノ頃ニ著名ナル一学校ヲ設立シテ大ニ幾何学ヲ進修弘開セリ彼有名ノエウクリッド氏ガ此校ニ従事セシハ人ノ知ル所ナリ降テ近代ニ至リケプレル氏ガリレオ氏タックイート氏パスカル氏デスカルテス氏、荷蘭ノホイゲンス氏、英吉利ノ牛黨〔ニウトン〕氏、マクラウリン氏、ラグランジ氏以下数家皆倍々数理学ノ範圍ヲ拡張シ之ニ因テ其昔時ニ在テ人智ノ到底及フ可カラサル所ト考定セシモノヲモ殆ト悉ク弁明シ得ルニ至ラシメタリ

【TTb】原弥一郎訳

幾何学^{英名之ヲ「ジオメトリー」ト称シジオトハ希臘語ニテ地球ノ意ニシテメトリートハ測ルノ意ナリ}ハ数学ノ支部ニシテ形状ト大小トヲ論究スルノ学ナリ故ニ総テ物ノ長短容積ヲ思究スル學術ヲ修学セントスルニハ至善至要ノ階梯ナリ航海家、建築家、測量家、工師、視学家ノ學術ハ大畧幾何其他数学ノ支部ニ基クモノナリ又総テ芸術ノ作工モ幾何学ノ含有スル規則ニ準ジテ作り而シテ天地間ノ機關モ亦此同規則ニ對準セルヲ觀ル数学ハ又裁理ノカヲ練磨培養シ論理学ニ大ナル補益アルモノナリ

幾何ノ起原ハ未タ確タル説ナシト雖モ往昔埃及国ニ於テ創造セラレ田地ヲ測量スルニ用井シモノナリト云フ而シテ最初数学ヲ以テ名アリシ人ハ紀元前六百年ノ頃ミリス州ノセーリスニシテ之ニ續デハプラウトウ氏種々ノ数学上ニ要用ナル發明ヲ為シ而シテ氏ハ常ニ数学ヲ以テ諸學術中至要ノモノト為セリ

幾何学上ノ改良ヲ加ヘタルヲ以テ高名ナル学校ヲ設立セシハ紀元前凡ソ三百年ニシテ彼ノ有名ナルイユクリット氏モ亦此校ノ人ニテアリキ又後世ニ於テハケプロル ガリハ タツケット パスカル デスカルト ハイゼンス我英国ノニユウトン マロウリン ラグランジ其他ノ諸学者数学ノ区域ヲ拓メ昔時ハ人間思想ノ及フヘカラサルコトシテ放棄セル者モ今ハ数学ノ

区域トナルコトハナレリ

どちらの翻訳者も冒頭で、「幾何学」が *geometry* の訳語であることを明確にする点は共通している。TTa では「ジオメリー」という左ルビを付けることによって、TTb では「英名之ヲ「ジオメリー」ト称シ」という文言を割注に挿入することによって、「幾何学」の横には「ジオメリー」があり、さらにその向こうには *geometry* が存在しているのだ。もっとも、「幾何学」の「幾何」は *geometry* の *geo* にあてた中国音に由来するという。『日本国語大辞典 第二版』によれば、「幾何」についての語誌は次の通りである。

(1) [幾何学の略としての「幾何」は]近世中国の洋学書に由来し、「*geometry*」の訳語として用いられた。用字の由来は、「*geo*」をギリシャ語で読んだ場合の音(土地の意味)を近世中国語音で音訳したものと考えられるが、さらに「幾何」の「いくばく」の意味に「*metry*」(測ること)の意味を掛けているともいわれる。もうしうなら「幾何」には「土地を測量する方法」の意味がこめられていることになる。もともと幾何学は、エジプトで土地測量のための実用的な学問として起こり、後にエジプトで数学の分野として発達したといわれるのでこの点「幾何」の用字は、その起源的な意味を表示しているともいえる。

(2) 日本では「附音挿図英和字彙」(第二版 明治 15 年)に「*Geometry* 測量術 幾何学」とあり、さらに「改正増補和英語林集成」には [...]「幾何」が「幾何学」の意味で登録されるに至る。是から、明治 10 年代後半には、「幾何」の語が一般化していたと考えられる。

ただし、「幾何」という語がそもそも漢語由来であることとは無関係に、異なる翻訳者によるテキスト TTa と TTb では共に、「ジオメリー」を媒介として *geometry* と「幾何学」が相互参照されるつながりを持つ。夏目漱石が『永日小品』「変化」(1909)において、「自分は英語で地理書や幾何学を教へた」(強調引用者)と書いているように、「幾何学」とは「地理書」と並んで英語という外国語で教えることができる対象なのである。

ST における *mathematical science* や *mathematics* は、TTa では「数理学」、TTb では「数学」として訳出されている。「数学」という語には「天文・暦法を含めた陰陽・五行・ト占の術の総称」(『日本国語大辞典 第二版』)という意味が含まれる点を考えれば、TTa の翻訳者が「数学」ではなく「数理学」を選んだ理由は首肯できる。また同時に、数学が「19 世紀に入って中国の洋学書などで *mathematics* の訳語として用いられた。明治初期に算数、幾何学、代数などの総称として次第に『算数』と使い分けられるようになり、数多く出版された漢字字書や外国語辞書にも採用され、一般化した」(同書「語誌」という状況があり、TTb では翻訳語としての「数学」が選ばれたといえる。

the best and surest guide は、形容詞の最上級が名詞を修飾する形である。これに対応するのは、TTa では「至精至確ヲ示スノ善東道者」、TTb では「至善至要ノ階梯」である。TTa の「東道者」は、漢籍『春秋左伝』の「東道(の主)」(東方への旅人をもてなす主人という意味。転じて来客の案内人や世話人)を踏まえたもので、*guide* の訳語である。最上級の訳出には申し合わせたよう

にいずれも「至」を用いている。これが「最」に移行するのは時間の問題だろう。

ST 全体の特徴的のひとつとして、過去分詞(受動態や名詞修飾)が多用されている(is devoted to, may therefore be said, are involved, required by, is deduced from, are considered, observed, has been frequently asserted, was first cultivated, celebrated, was made, was established, celebrated, were considered)。2つの翻訳において受身性を明示しているのは、TTbの「埃及国ニ於テ創造セラレ」(was first cultivated in Egypt に対応)一例のみである。いずれの翻訳者も意識的に受動態を回避していると思われぬ。つまり、日本語の受動態が英語と異なるものであることを認めているのである。

最後に2つの翻訳テキストTTa(佐原純一訳)とTTb(原弥一郎訳)の全体を比較すれば、訳文の長さ(TTaは787字、TTbは532字)に言及しておかねばならない。これは単純な差異であるが、同一のST(264 words)に対して、TTaはTTbの約1.5倍もの長さという事実は無視できない。テキストの内容は幾何学に関する概論的な説明であり、きわめて客観的叙述であるが、翻訳者によってこれほど違ってくるのだ。ここで行為としての翻訳を改めて意識しておきたい。

例えば、第1段落最後の文を比べてみよう。STは、The study of mathematics, generally, is also of great importance in cultivating habits of exact reasoning; and in this respect it forms a useful auxiliary to logic.であり、対応するTTaは「故ニ総テ数理学ヲ講明スルノ事ハ遍ク事物ノ理ヲ精確ニ推論スルノ習練ヲ養ハシムルニ甚タ緊切ナルモノナリ試ミニ論理(ロジック)学ヲ看ヨ数理学実ニ之ヲ補賛シテ始メテ其完キヲ成スニ非スヤ」、TTbは「数学ハ又裁理ノカヲ練磨培養シ論理学ニ大ナル補益アルモノナリ」である。読者に語りかけるTTaの文末(「看ヨ」「始メテ其完キヲ成スニ非スヤ」)が、TTbの淡々とした印象と対照的だ。このような差異は、訳されたテキストと原著との関係性を問い直す。ST = TTaとST = TTbという等式は、TTa ≠ TTbによって(少なくとも部分的に)崩れる。ただし、その関係が等価という幻想に依拠しているのが翻訳であり、その呪縛から逃れることはできない。こうして翻訳という言語行為は遂行されるのである。

5. おわりに

本稿では、近代日本における文明開化の途上で生産(そして消費)された翻訳テキストに注目して、翻訳実践の場の変遷も含めて考察した。国家的翻訳プロジェクトであった文部省『百科全書』を歴史的及び社会的に位置づけ、原著と比較対照しながら翻訳語と翻訳文体を中心に分析を行った。限定的なテキスト分析ではあるが、語彙(翻訳語)と文法(翻訳文体)のレベルで明らかになった点を確認しておこう。

まず語彙のレベルでは、翻訳語とは何かという問題である。翻訳語として多用された漢語は、過去を継承しながらも切断して、近代日本語の語彙を増加させた。文部省『百科全書』という啓蒙のためのテキストにおいては、起点言語と目標言語の力関係は歴然としていた。英語から日本語への翻訳において、この力学はいかに作用したのか。明治初期、圧倒的に優位な異国のテキストを翻訳するという言語行為は、未知の概念を日本語で擬製した。したがって、翻訳語の意味は新しく生まれた日本語ではなく、外国語にその起源を持ち、一方的に定義されたのだった。翻訳は等価な意味をもたらすはずであるという思い込みは、ニランジャンナのいう「支配者なき

植民地主義」と通底する。こうして、翻訳語に「西洋」が縫合される。しかも、そのような新しい語彙は、テキスト構成における文法レベルからの要請でもあったのだ。学術テキストが論理展開をするためには、情報構造として主題と題述を配置したり、語彙的結束性を保つことが死活的に重要である。そして、それらに寄与する名詞が必要となる。漢語はうってつけの名詞を大量に生み出した。日本語テキストにおいて名詞として配置できないものは、時として動詞的に解かざるを得なかったが、やがて翻訳語として成立したものは近代日本語の語彙となり、文法の要請に応じてテキストを構成した。そうなれば、翻訳行為が遂行した等価という幻想は、もはや既成事実として不問にすればよい。

翻訳者の個人差は無視できないし、まさにその差異こそが翻訳の行為性の証左となる。したがって、過剰な一般化には慎重にならざるを得ないが、文部省『百科全書』には明治初期の日本における近代学術テキストの特色が窺える。それは、開化期の翻訳行為が格闘してきた語彙と文法の痕跡を残すものであり、翻訳の等価に仮託して、西洋近代の知を近代日本語で体系化した啓蒙のテキストなのである。

.....
【著者紹介】

長沼美香子(NAGANUMA, Mikako)立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。
 日本通訳翻訳学会理事。連絡先:mikakonaganuma@gmail.com

.....

【参考文献】

- 福鎌達夫(1968).『明治初期百科全書の研究』風間書房.
 福沢諭吉(1995 [1975]).『文明論之概略』岩波書店.
 藤井貞和(2010).『日本語と時間:〈時の文法〉をたどる』岩波書店.
 Halliday, M.A.K. (1994). *An introduction to functional grammar, second edition*. London: Edward Arnold.
 畑有三(2003).「民友社と硯友社」西田毅・和田守・山田博光・北野昭彦編『民友社とその時代:思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡』ミネルヴァ書房.
 ヘボン著・飛田良文・李漢燮編(2000-2001).『和英語林集成:初版・再版・三版対照総索引』港の人.
 廣松渉(2007 [1997]).『もの・こと・ことば』筑摩書房.
 稲垣達郎編(1989).『総索引 明治文学全集 別巻』筑摩書房.
 石井研堂(1944 [1907]).『明治事物起原』春陽堂.
 川戸道昭(1999).「明治のアンデルセン:出会いから翻訳作品の出現まで」川戸道昭・榊原貴教編『明治期アンデルセン童話翻訳集成』(237-276 頁)ナダ出版センター.

- 黒岩比佐子(2010).『パンとペン:社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社.
- 羅布存徳原著・井上哲次郎訂増訂(1995 [1884]).『増英華字典』〔復刻版〕ゆまに書房.
- 松平直亮(1933).『泊翁西村茂樹伝 上巻』日本弘道会.
- 松永俊男(2005).「チェンバーズ『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」『*Chambers's Information for the People* 〔復刻版〕別冊日本語解説』ユーリカ・プレス.
- 文部省編(1873).『文部省第一年報』出版者不明.
- 森岡健二編(1991).『近代語の成立』明治書院.
- 夏目金之助(1994).『漱石全集 第12巻』岩波書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編(2000-2002).『日本国語大辞典 第二版』小学館.
- Niranjana, T. (1992). *Siting translation: History, post-structuralism, and the colonial context*. Berkeley, CA: University of California Press.
- 大槻文彦(1907).『箕作麟祥君伝』丸善.
- 大槻如電(1927).『日本洋学年表』六合館.
- 堺利彦(1912).『売文集』丙午出版社.
- 佐藤亨(1986).『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社.
- 菅谷廣美(1978).『「修辞及華文」の研究』教育出版センター.
- 杉村武(1967).『近代日本大出版事業史』出版ニュース社.
- 高野繁男(2004).『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』明治書院.
- ス維爾士維廉士(1995 [1869]).『英華字彙』〔復刻版〕ゆまに書房.
- 柳父章(1982).『翻訳語成立事情』岩波書店.
- 柳田泉(1961).『明治初期翻訳文学の研究』春秋社.

